

1 調査の目的

毎年4月に実施されている「全国学力・学習状況調査」は、以下に示されたことを目的としています。

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
※文部科学省「調査マニュアル」より

2 調査の対象

小学校第6学年の全児童と中学校第3学年の全生徒です。

3 調査の内容

(1) 教科に関する調査(国語、算数・数学、理科)

・国語、算数・数学にはA問題とB問題がありますが、平成31年度の調査からは一体となります。

A問題→身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい**知識・技能**などを中心とした出題。
B問題→知識・技能等を実生活の様々な場面に**活用**する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力などに関わる内容を中心とした出題。
※文部科学省「調査マニュアル」より

・平成31年度の調査では、中学校で新たに英語が実施されます。

(2) 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

・児童生徒を対象に、学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査となります。

4 調査の結果と考察

(1) 教科に関する調査

国語(小学校245人、中学校263人)

○ 小学校A問題について

やや全国平均を下回った要因として、「漢字を正しく書く力」についての課題が解消されていないことが挙げられます。家庭学習と連携をして、定着を図ります。また、「主語と述語の関係を捉えること」にも課題が見られます。国語だけでなく各教科において、文の構成に注意して作文することを重視していきます。

○ 小学校B問題について

昨年度に続いて、全国平均を上回ることができました。無解答率が低く、書くことに対する抵抗感は感じられません。与えられた条件に沿って作文する問題の正答率が、全国平均や県平均を大きく上回っていました。「書く能力」をさらに高めるため、今後も継続して自分の考えを書く活動を重視していきます。

○ 中学校A問題について

昨年度に続いて全国平均を下回ったものの、差は縮まりました。「読む能力」を評価する問題は正答率が高い一方、「書く能力」を評価する問題の正答率が低かったため表現力の向上を図る必要があります。

○ 中学校B問題について

今年度は全国平均を上回ることができました。やや難しい記述式の問題でも無解答率が低く、自分の考えを書こうとする意欲が感じられました。一方で「文章とグラフとの関係を考えながら内容を捉える」ことに課題が見られました。複数の資料を関連付けて情報を読み取る活動を重視していきます。

算数・数学(小学校245人、中学校263人)

○ 小学校A問題について

昨年度に続いて全国平均を上回ることができ、「基礎・基本の学力」が定着しているといえます。しかし、円周率や百分率を求める問題の正答率が低く、「割合」に関する学習内容の定着を図る必要があります。公式の意味を考えたり、公式を変形したりする学習を重視していきます。

○ 小学校B問題について

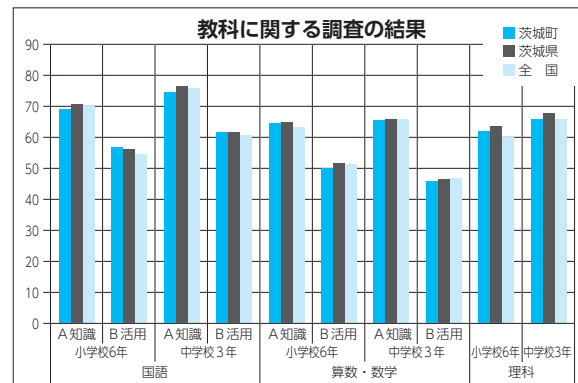
全国平均を下回った要因として、複数の資料から情報を読み取ったり関連付けたりする問題の正答率が低かったことが挙げられます。複数の資料を比較したり関連付けたりする活動を重視していきます。

○ 中学校A問題について

昨年度に続いて全国平均を下回りましたが、差は確実に縮まっています。基礎的な学習内容の定着を図るとともに、「図形領域」と「関数領域」に対する苦手意識の払拭に向けて努力していきます。

○ 中学校B問題について

全国平均をやや下回りましたが、「証明」に対する苦手意識が感じられました。図形の証明過程について、式や言葉など数学的な表現を適切に用いて説明する活動を重視していきます。



理科(小学校245人、中学校263人)

○ 小学校

全国平均を上回ることができました。無解答率も非常に低く、基礎的な知識が身に付いていると判断できます。特に、化学や生物に関する内容の正答率が非常に高かったです。一方で、実験や観察を行った後の考察に課題が見られました。「学び合い」の中で多様な視点で考察することを重視していきます。

○ 中学校

全国平均とほぼ同じ結果でした。生物的領域に関する正答率が高く、物理的領域に関する正答率が低いことが分かりました。また、実験や観察を行う際に条件を制御することに対する知識・技能に課題が見られます。今後も、小グループでの「学び合い」を通して「深い学び」を展開していきます。

学習指導要領の改訂に関して

新しい学習指導要領で育成を目指す資質・能力の三つの柱は、「何を知っているか、何ができるか」という【知識・技能】、「知っていること、できることをどう使うか」という【思考力・判断力・表現力等】、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」という【学びに向かう力・人間性等】です。これらの資質・能力は、【主体的・対話的で深い学び】を通して育成されるもので、学びの深まりを生むカギが各教科における「見方・考え方」だと言われています。茨城町では、「学び合い」と「ICT活用」を柱に今後も授業改善を進めるとともに、「小中連携」や「保幼小連携」の一層の推進を図っていきます。

新しい学習指導要領は、小学校が2020年度より、中学校が2021年度より全面实施となります。移行期間中の今年度は、小学校で「道徳」の教科化、3・4年生で外国語活動の実施、5・6年生で外国語の実施といった変化がありました。次年度は、中学校でも「道徳」が教科化され、外国語活動や外国語の時間がさらに増えます。また、小学校で「プログラミング学習」も始まる予定です。

教育の大きな変革にスムーズに対応することができるよう、茨城町では様々な研修を行って教職員の資質向上に努めているところです。茨城町の教育のさらなる充実を目指し、今後も努力していきます。

(2) 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

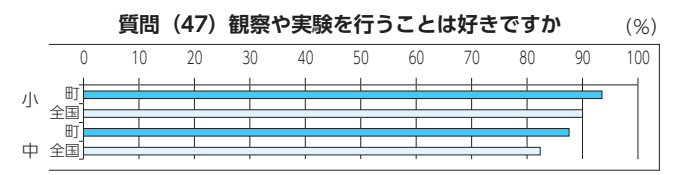
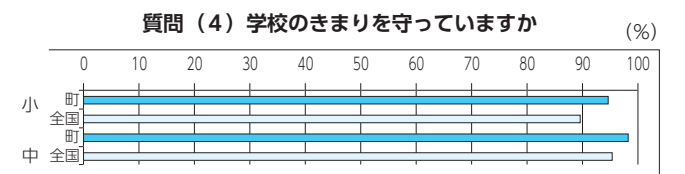
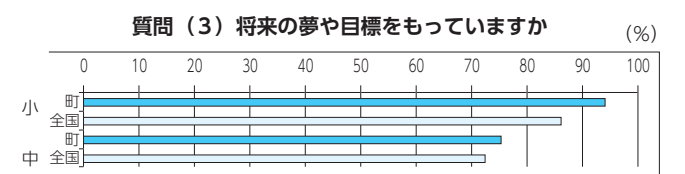
全国平均を上回った主な質問項目

小学校においては、数多くの質問項目で全国平均を上回りました。特に、朝食や睡眠時間など基本的な生活習慣に関する質問項目の結果が顕著で、規則正しい生活習慣が定着していることがうかがわれます。さらに、「先生が自分のよいところを認めてくれる」「人の役に立ちたい」という意識が高いことも分かりました。また、昨年度と比較して自尊感情が高くなりました。中学校においては、全国平均と大きな差があまり見られませんでした。その中で、「将来の夢や目標を持っている」「学校のきまりを守る」等の質問項目は全国平均を上回りました。向上心や規範意識が高いことがうかがわれます。また、小中学生とも理科の観察や実験を好んでいることが分かりました。今年度の理科の結果にも影響したと思われます。

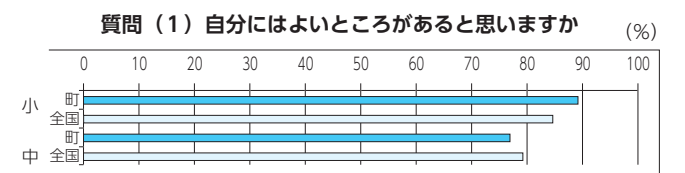
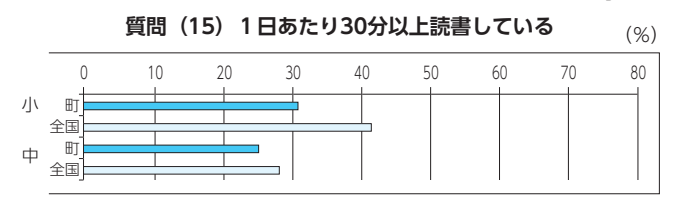
全国平均を下回った主な質問項目

小中学校ともに、全国平均と比べて1日あたりの読書時間が短い傾向が見られました。1日あたりの読書時間を「10分以上、30分より少ない」と回答した割合が小中ともに最も多かったです。茨城町では、朝の時間などを活用した読書活動を推進しておりますが、今後も継続していきます。また、中学校では「自分にはよいところがあると思う」という質問項目が、昨年度に引き続いて全国平均を下回りました。自尊感情は自分を大切にすることで欠かせません。茨城町の中学校では、生徒を前面に出して行事を運営するなど、自己有用感を高める様々な取組を行っています。自分のよさに気付くとともに、他人のよさにも気付く子供たちを育てていきます。

※そう思う、どちらかというと思うと回答した割合



※そう思う、どちらかというと思うと回答した割合



【問合せ先】 学校教育課 指導室 ☎ 029-240-7138 (直通)